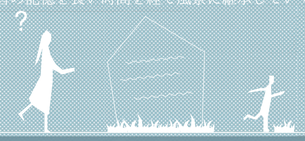
イグネットワーク

ひとの時間と自然をつなぐ道のデザイン

00. Memorial Landscape とは　―問題提起

1000 年後、その土地に残る記憶とはどんなものだろう。石碑に残る文字を 1000 年後の人々が見たときに、残すべき記憶は継承されているのだろうか。

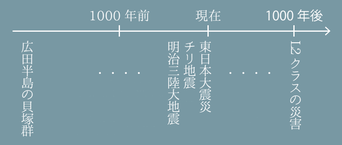
東日本大震災のような大きな出来事を社会的刻印として残すというのは、非常に公的な作業であり、個人が持つ痛烈な負の記憶に対して、その公共性を考えることが重要である。
また、1000 年という規模で景観を考えるとき、物質的な刻印はどれほどその時間の経過に耐えられるだろうか。どうすれば後世に伝えていくべき災害の記憶を長い時間を経て風景に継承していくかを考えることも重要である。



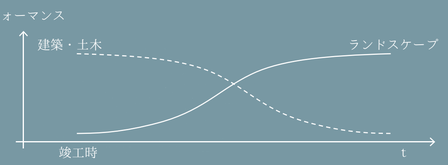
01. 1000 年残るものとしての“自然”と“人々の習慣”

1000 年とは我々の感覚を遥かに凌駕する時間スケールの中に現れ出る。
建築や土木構造物は、竣工時に最も性能が高く、さらには100年という時間スケール以内に位置する。ランドスケープは、竣工時から少しずつその姿を表し、どう育てるかも大きな観点である。そしてそこに現れる植物や周囲の自然との関係性は 1000 年の時間スケールを持ちうる。
また、1000 年の時間スケールでは人々に定量的で物質的な記憶を残すことは現実的ではなく、むしろ伝承や人々の行動習慣に刻むことが可能性として挙げられる。

〈1000 年という時間スケール〉



〈建築・土木・ランドスケープにおける時間〉



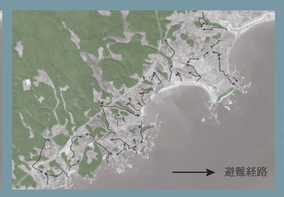
〈時間スケールごとの習慣と自然の変化〉

	1 日	1 カ月	1 年	10 年	100 年	1000 年
習慣	通行	集会	祭り	防災施設の更新	人生のサイクル	集団の慣習
自然	太陽の動き	草花の変化	落葉樹の変化	樹木の成長	森林や草原	風景の変化

02. 現況分析

2021 年現在、JR 気仙沼線の多くの区間は、鉄軌道の震災の復旧難易度の高さから、BRT により運行している。
多くは廃線路区間を BRT 専用道路として運行しているが本吉町においては、運行ルートと廃線路が異なる。
また、この廃線路をおおよそ起点として海側と山側の高台に向かって行政の定める避難経路が伸びている。
周辺にはイグネや川沿いの緑が点在している。

JR 気仙沼線の旧鉄軌道と BRT 路線



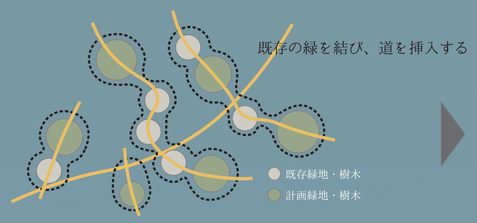
浸水地域を鑑みた避難経路（気仙沼市より）

対象地にみられる屋敷林“イグネ”の緑

03. コンセプト

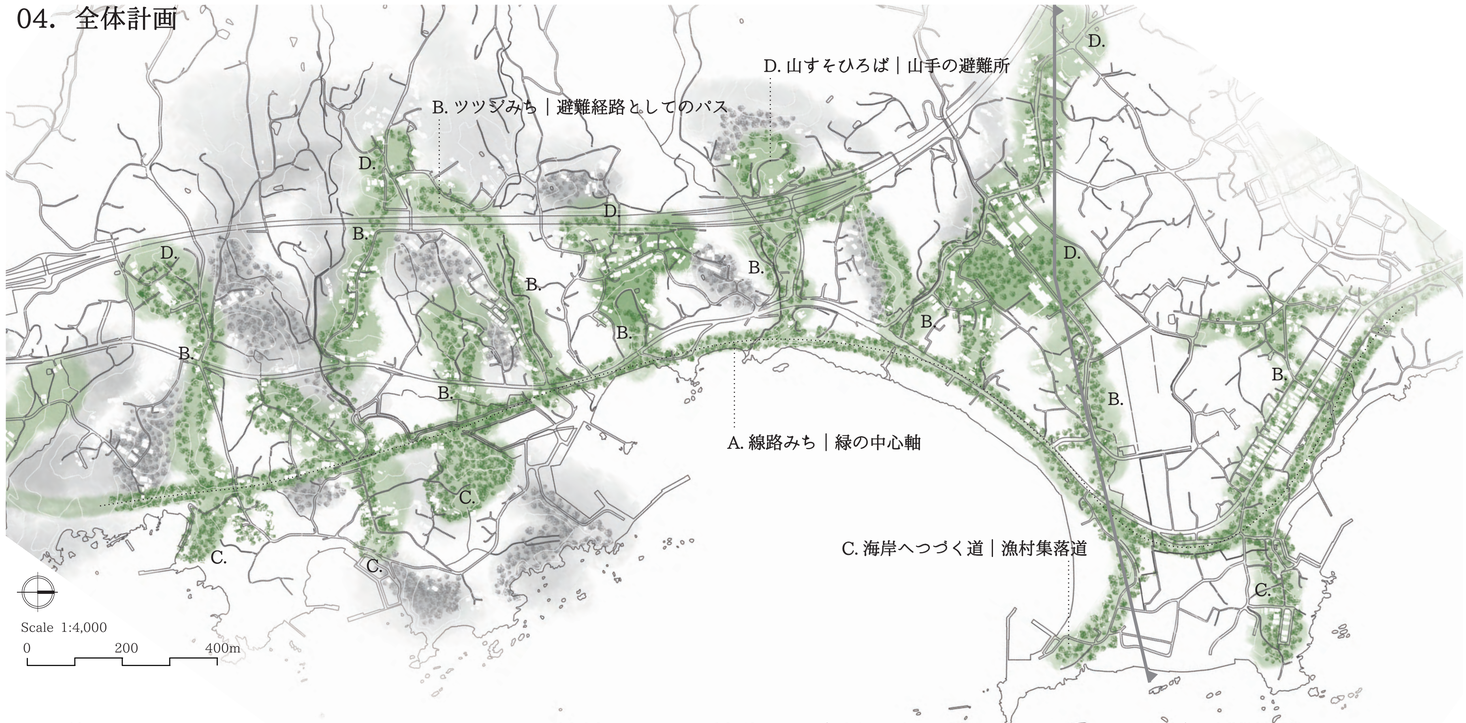
“竣工からはじまる、ひとの時間と自然を繋ぐ道のネットワーク”

・避難経路を習慣化していく　・既存の自然をつなげ、時間の存在を示す大きな緑を育てる



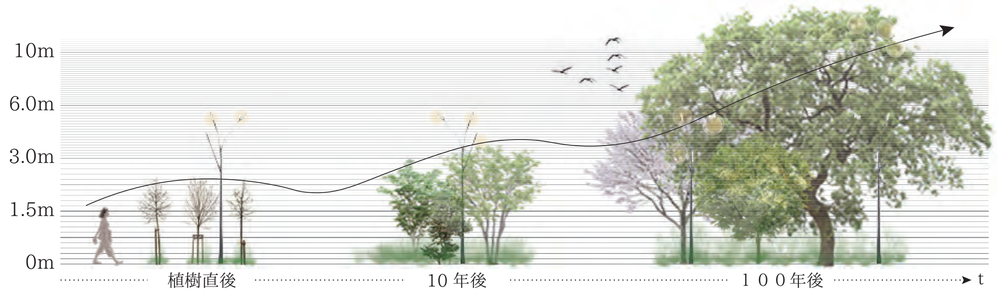
地域の骨格 ＝ 廃線路
ネットワーク ＝ 避難経路
ポイント ＝ 避難所（海手・山手）

04. 全体計画



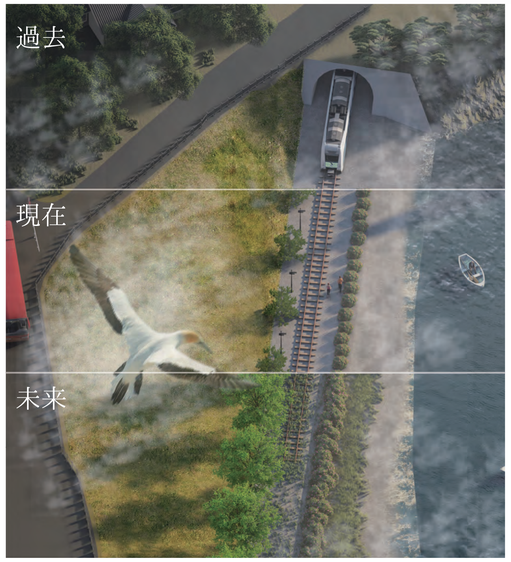
05. 時間の痕跡を残す植物と人工物の関係性

対象地ごとのいぐねと、それらの添景物であるライトポールとの対比により、気仙沼･本吉の風景に時間的変化をもたらす。1 年、10 年、100 年、1000 年と経つにつれて、植樹直後は図となっていたライトポールが樹木に溶け込み、樹種が異なっていても同じような高さで地となっていた木々はそれぞれの個性や色を放ち、その空間の図となっていく。



06. 過去・現在・未来を繋ぐ“くさび ”としてのライトポール

07. 道のケーススタディ



都市計画上災害時に重要とされる場所やパスなどを対象として、線形のいぐねと道、楔としてのライトポールを重ね合わせる。それらは時間とともに移り変わる要素／不変の要素となり相互に影響し合い、全体として立ち現われる風景に時間的変化をもたらす。

A. 地域をつなぐ線路みち｜緑の中心軸

｜現況｜JR 気仙沼線の跡が残り、LRT 路線としての利用はなされず、線路・線形空間が残されている。周囲との土地高低差は大きく、海は望みにくい。｜計画｜廃線沿いに気仙沼の植栽として特徴的なヤブツバキを植え、外側に街路樹としてのケヤキや防潮・防風林としてのクリ、タブノキなどを植え、すり鉢状の植栽計画断面として空に開いたシークエンス景観を演出する。冬にはツバキによる開花や花絨毯を見ることができ、本吉をぐるりと巡る観光ルートとなる。

クリ Castanea crenata　ケヤキ Zelkova serrata　ヤブツバキ Camellia japonica　廃線跡 Discontinued line

B. ツツジみち｜避難経路としてのパス

｜現況｜住宅エリアを抜け、山や高台へと計画避難経路とされている道だが、残された自然が繁茂しており、視認性は低く、一部にはかつて使われていた車道なども残る。｜計画｜避難経路としての機能を担保するため舗装はそのままに、道路沿いを気仙沼の観光でも有名なヤマツツジで彩る。春にはツツジの花が咲き、散歩コースや祭りに取り入れられるようになることで、住民にとってイメージマップに残りやすいパスが形成される。

カツラ Cercidiphyllum japonicum　ミズメ Betula grossa　ヤマツツジ Rhododendron kaempferi　アスファルト Asphalt

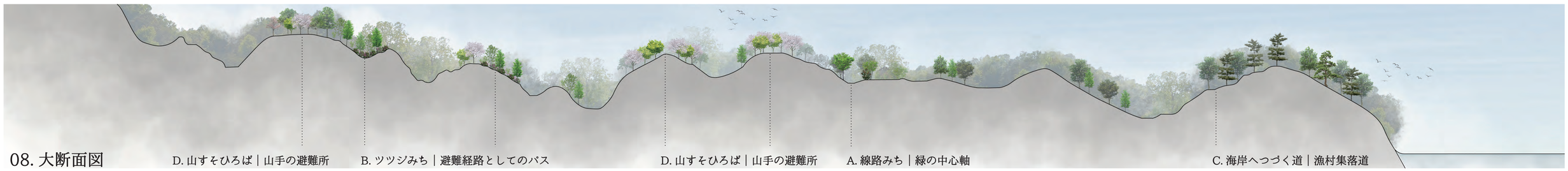
C. 海岸へつづく道｜漁村集落道

｜現況｜気仙沼港を含む複数港周辺には漁村集落があり、土地の起伏が激しい気仙沼において漁村集落からは海を望むことができる。海沿いのアカマツやクロマツは流され、白砂や雑草が残っている。｜計画｜海に近く防潮林の機能を担保するため、海側には潮風に強いアカマツやクロマツを、陸側には高さがあり防風効果を高めるカシワやトベラを植える。有機的なパスデザインにより、白砂とマツの組み合わせをより象徴的にし、海へ向かう空間体験を印象付ける。

クロマツ Pinus thunbergii　アカマツ Pinus densiflora　カシワ Quercus dentata　トベラ Pittosporum tobira　白砂 White sand

D. 山すそひろば｜山手の避難所

｜現況｜都市計画において避難先に指定されている山手の高台は、居住エリアとは離れ、人気の少ない場所となっている。そのため海を望める場所だが、雑草や木が密に残っており、鳥などの動物にとって大切な住処となっている。｜計画｜イロハモミジやソメイヨシノを植え、舗装などはできるだけ手を加えず、現在の環境を残す。開かれた高台ひろばからは水平線が見え、自分がいる場所とシームレスにつながる景観体験をすることができる。

イロハモミジ Acer palmatum　ソメイヨシノ Cerasus × yedoensis　クスノキ Cinnamomum camphora　コナラ Quercus serrata　ヤマボウシ Cornus kousa

08. 大断面図